

韓国大真大学との国際交流について

西田 隆義

環境生態学科

1. 交流協定締結のいきさつ

大真大学はソウルの北郊の抱川（ポチョン）市にある私立大学で1991年に創設された新興の大学です。大真大学が環境科学に関心を持ち、本学を訪問されたことがきっかけとなって、交流が始まりました。韓国と北朝鮮の国境、いわゆる38度線は、朝鮮戦争終結時に設定された暫定的な停戦ラインです。停戦ラインから南北にそれぞれ数キロの範囲は、非武装地帯（De-militarized Zone: DMZ）として朝鮮戦争終結の1953年から現在まで、自然のままに放置されました。60年近く自然にまかされたため、豊かな自然が回復し、現在は湿地を中心とした野生生物の宝庫となっているようです。しかし、現地は未だに一時的停戦地帯であり、調査には危険と困難を伴います。そのため、DMZの自然生態系については、不明な点が多くのごされたままです。大真大学はDMZの自然研究に強い関心があり、それが環境科学部との学術交流を望む理由の一つとなっています。

2011年の4月に、野間先生、韓国語に堪能でかつて同大学において教鞭をとられていた長谷川先生（当時国際教育センター）とともに、同大学を訪問しました。同大学のDMZ（非武装地帯）研究所と環境科学部間の研究協力について、同大学総長 Lee Chun-Soo 氏、同大学産業協同機構長（President of University Industry Cooperation Foundation）Sang-Hoon Lee 氏、同大学国際交流院長（Director of International Affairs and Education）Kwon-Ho 氏などと協議をして、交流の第一歩としました。その後、2011年の12月に同大学DMZ研究所・森林研究所と環境科学部が交流協定を締結するに至った次第です。

2. 韓国の変貌

以下に、訪韓した際に感じた雑感について書きます。私は、1980年代末から数年間にわたり、インドネシアで熱帯生物の研究を行っていました。当時は、運賃が安かった大韓航空を使っていました。大阪を出ると、ソウルで一泊し、翌朝金浦空港からインドネシアへ向けて出発しました。ソウルの街で、まったくメニューが読めないのに適当に注文をして、親切な店員さんにたしなめられたり（2人で10人前くらい注文してしまったため）、焼肉のコンロ

の上に巨大なアルミの排煙筒が下がっているのをみて驚いたり、異文化を味わいました。当時は、まだ町並みは多様というか雑駁というか、大阪の下町みたいな感じで、「命よりも時間が大切」という暴走タクシーに肝を冷やしました。

二十数年ぶりに訪れたソウルは激変していました。かつての小さな雑居ビルや木造住宅はほぼなくなり、かわって巨大なビルと高層マンションが立ち並ぶ街になっていました。韓国の経済成長ぶりからはっきりと分かる変貌でした。しかし、町並みの変化よりもっと驚いたのは、日韓の若者文化の共通性でした。夜、ソウルの繁華街でみかける若者は、日本の大都市の若者とほとんど同じ格好をし、同じような音楽を聞き、同じようなものを飲みかつ食べていました。東アジアに共通の若者文化が出現しているのを、如実に感じられるひと時でした。街の本屋さんには、かなりの量の日本語の本や雑誌、マンガが並び、日常生活に深く浸透しているのをみて驚きました。マスコミでは、日本と韓国の間未だにわだかまる問題ばかりがしきりに報道されます。それはもちろん事実の一面なのですが、その反面、新しい共通文化が出現しているのもまた事実なのを知りました。

3. DMZ シンポジウムへの参加

大真大学を訪問し、学長や大学執行部の方と交流について相談し、研究者の学術交流を中心として関係を深めてゆくことが合意されました。そして、2011年の秋に韓国で開催されるシンポジウムに参加することとなりました。

2011年のDMZシンポジウムは朝鮮半島の平和に関連して開催されたもので、われわれは韓国南端の釜山から特別列車に乗って北朝鮮国境付近までシンポジウムを聞きながら旅行することになりました。シンポジウムでは、野間先生が「日本の野生鳥獣の増加とそれに伴う獣害」について講演し、私は「日本における外来種問題」について講演しました。長谷川先生と韓国側通訳の方（長谷川先生の大真大学での教え子だそうです）が、日本語、韓国語、英語を自在に通訳してくれたおかげで、講演も質疑応答もスムーズに進行しました。韓国側の講演者は、韓国における野生虎の現状や日韓の文化的な問題などさまざまな話題について話しました。DMZに今

も野生虎が生息しているかもしれないという話は、生態学的にみて疑問でしたが、絶滅せずに生き延びてほしいという強い希望があることがよく分かりました。アトラクションとして、韓流映画スターが登場しましたが、芸能情報に無知な私には猫に小判でした。

早朝、ソウルを出発し途中、韓国の田舎の風景を楽しみながら、列車は進んでゆきます。日本の風景と比較すると、やや乾燥が強く、松とコナラに被われた瀬戸内あたりの里山を彷彿とさせる風景が続きます。それにしても、里山の樹林が回復しているのには驚きました。二十数年前には、ソウル近郊の山は、花崗岩の岸壁が露出し、わずかに松が生えた貧相な森でしたが、現在ではかなりの程度に里山の植生が回復しているのが分かりました。日本で、燃料革命とともに薪炭林が放置されて、山の緑が回復したのと同じように、韓国でも同じ変化がおこっていました。山の緑が回復するにつれて、獣害、とくに野生のイノシシによる農作物や人への被害がおこっているようです。近年の韓国映画で、巨大イノシシが暴れるというファンタジーものがありました。その背景には、里山林の回復と野生動物の増加があったわけです。考えてみれば、どこの国でも同じような変化がおきることは自然なことですが、あらためて人と自然の関係の普遍性に気づかされたわけです。

特別列車が終着駅に着き、そこから38度線へ向かいました。国境線は、観光地となっており、韓国、北朝鮮がそれぞれ国境付近にプロパガンダのために、「理想の村」を作っていました。北朝鮮の理想の村は、ビルディングでおそらく「現代的生活」をアピールしたいのでしょう。これに対して、韓国の理想の村はいわゆる郷愁にみちた昔風の農村で「マンガ日本昔話」みたいなものでした。私にとってもっとも驚いたのは、国境をはさんで、北側にはほとんど一木一草もない裸地が広大に広がっており、これに対して南側は広大な雑木林になっていることでした。化石燃料に頼らず、薪や炭に全面的に頼る生活をすると、あっという間に森は壊滅することが如実に分かる風景でした。北朝鮮からは、たびたび巨大な洪水被害が報道されますが、その理由として山が禿げ山で保水力がないことが強く伺われました。現在、日本の里山が森に被われているのは、日本人がほとんどのエネルギー源を化石燃料に頼っている結果であることを改めて認識させられました。

夜は、パジュ市で開催されるDMZ国際ドキュメンタリー映画祭に出席することになりました。映画監督や俳優といった多数の有名人が出席してしま

したが、芸能リテラシーが全くない私には豚に真珠でした。一つ気がかりだったのは、映画際のグランプリを取った映画「災いの黙示録：アントニー・バツ監督」の内容でした。ちょうど、福島原発事故から半年あまりという時期でもあり、グランプリはカザフスタンの核実験場周辺における放射線被害を扱った映画でした。映画では、放射線被害による先天異常を持つ母親が、子どもの出産に対していさぐち不安が扱われていました。しかし、先天異常は放射線障害とはとても思えず、また広島や長崎の被ばく者の子孫で遺伝疾患が増えないことや、さらに事実関係があいまいなことを考慮すると、恐怖を煽る典型的なプロパガンダにしかみえませんでした。日本においても、福島原発事故以来、チェルノブイリハートなどいくつかの良く似た映画が上映され、放射線被害を極端に誇張して恐怖を振りまきました。いかに荒唐無稽な陰謀論とはいえ、ベラルーシでは出生児の8割以上に先天障害があるなどという話を、どうすれば信じられるのか不思議です。被害を極端に誇張することも、目的が正しければ正当化できるという意見もあると聞きます。しかし、福島での原発事故以来の状況は、こうした考えが恐怖心を無意味に煽るだけで、問題の解決のさまたげになることをはっきりと示していると思います。そんなわけで、この映画にはがっかりしました。

4. ソウルのホテル事情

ソウルは人口が1000万を超える巨大都市で、日本人を含め驚くほど多くの外国人観光客が来ていました。観光客が多すぎてホテルをみつけるのは本当にたいへんです。われわれが訪韓した際も、ホテルが見つからずに困ったことがありました。お世話してくれた方が、つてを頼りにあちこちに電話してもなかなか見つからず困りました。こんな時の秘密兵器は、ラブホテルだそうです。早い時間帯には無理ですが、夜遅くなり、ホテル側が稼働率を気にしなくなる時間帯となると、泊まれることが多いようです。そういう事情で、ラブホテルに泊まるという貴重な経験ができました。宿泊施設としての設備はむしろ普通のホテルよりも良いという評判でしたが、機能的に必要なためか窓がなく、なんとなく圧迫感があるのには閉口しました。

5. DMZをめぐる現状

残念なことに、交流協定締結後もDMZをめぐる国際情勢はさらに緊迫の度を深めています。DMZは世界に残る冷戦の唯一の遺構となってしまいました。北朝鮮指導部における権力の継承や、それに伴

うさまざまな政治的な騒動は、周辺諸国を否応無く巻き込んでしまいました。それに加えて、同じく冷戦の後始末である国境をめぐるいざこざも、報道されて久しいところです。最近では、いずれの国においても偏狭なナショナリズムを声高に叫ぶのが目立つようです。表面的にみると、暗い面ばかりが目につきますが、東アジアに共通の文化が醸成されつつあるのもまた事実です。こうした流れが、東アジアにおける学術交流にもよい結果をもたらすことを期待したいと思います。